

Titibu591

秩父平成10年4月 59号

今回から軍校の伝田信夫の五族協和を夢見ての満州での体験、苛酷な運命に弄ばれた同期生の回顧、いまだに友情の絆で結ばれている満蒙系同期生との再会等々を綴った大作を連載する。

五族之墓 1～3 満洲軍官学校体験記

伝田信夫

予科軍1-1
本科經理
(春日部市)



五族之墓に詣でる

陸士60期滋賀全国総会の翌9月29日、高野山ルートでの観光に参加した。このコースを選んだのは、高野山にある満洲国軍の『五族之墓』に詣でるためである。

『五族之墓』とは、東京池上本門寺にある『蘭花之碑』と共に、満洲国軍に所属された武官文官及び職員の方々の霊を祀るため、満軍縁りの人々が建てたものである。大津を後にしたバスは、昔仕事で通った近鉄奈良線に沿って秋深い大和路を南下する。曼珠沙華や、その葉で寿司を包む柿の木が目を楽しませ、通過する街では、20年前に取り組んでいた仕事のことが思い起される。

大門に着くと、専門のガイドがついた。

山の由来と弘法大師の入山・人定、開山から今日に至る歴史等、名調子の説明を聞きながら参観する。

昼食前に、ガイドに『五族之墓』のことを聞くと、「あゝ満洲の…毎年皆さん熱心に行事を行っています」との返事。直ぐ近くにあり案内してくれるという。昼食もそこそこに、休憩時間を利用して『墓』に向かう。『墓』は、向かって右から、蒙古民族之墓・満洲民族之墓・漢民族之墓・朝鮮民族之墓・日本民族之墓と

並べて建てられている。中央の慰霊碑を囲む二つの碑面に、戦没された方々と戦後亡くなった方々のお名前が彫り込んでいる。碑の前に建てられた灯籠に刻まれた曾ての上官のお名前を拝見すると、今更のように胸に迫るものを覚えた。お参りを済ませた後、お墓の佇まいをビデオと写真に収め、ガイドにシャッターを切って貰ったもう1枚を加え記念とする。

『墓』の周辺には、『特攻隊』・『陸士56期』・『前橋予備士官学校』等々大東亜戦争に殉じた勇士達を顕彰しその霊を慰めるための碑が建てられている。祀られる方も祀る方も、過ぐる大戦に、その一命を賭して国の難儀に臨まれた方々である。



高野山にある五族之墓

満洲国の建国

満洲国は、1932（昭和7年）3月、『五族協和』と『王道楽土』の建設を国是として誕生した。

その版図は、概ね現在の中国東北3省と蒙古自治区の一部を含んでいた。国旗は建国の精神を象徴し、黄色地の四分の一の部分に、赤・青・白・黒の四色の筋を配した五色をもって『満洲五族』を象徴するものとされた。黄色は沃土慶福、赤は情熱赤誠、青は青春澆刺、白は博愛平和、黒は堅忍不拔を表す色と云われている。また、蘭の花を国花とした。

満洲国軍の創設と発展

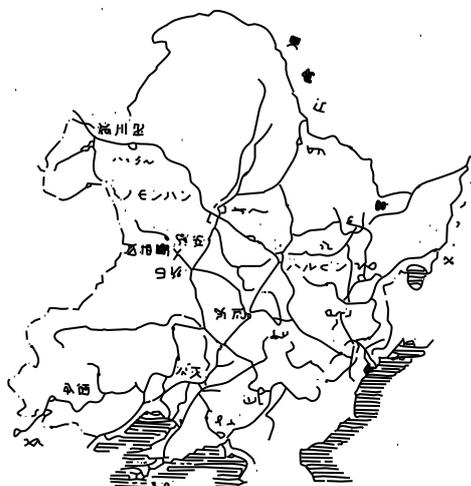
建国に際して、満洲国の対外的防衛は関東軍の責任としつつ、内部治安軍としての国軍の建設に着手することとなった。国軍については、当初、従来の東北軍や建国に参加した有力者が提供する兵員を基礎として編成され、当面の治安任務を

遂行しながら制度の整備と部隊の整備が進められた。建国5年後の1937年に、治安部（後の軍事部）を設置して以降、国軍の整備は着実に進むようになった。同年7月時点には、5個軍管区・36個混成旅団・7個騎兵旅団・5個教導学校等を擁する迄になった。

大東亜戦争の進展に伴い、それに呼応する国兵制度の整備が進められ、従来以上に優秀な壮丁が選抜されて入隊するようになり、隊員の淘汰と質の向上も見られるべき成果が挙げられるようになった。

太平洋戦域の戦況が緊迫するにつれて、北にはソ連の動向を懸念しながらも、関東軍の兵力を南方戦域へ抽出転用する必要から、満洲国軍の充実が急務となった。この要請に応じて国軍の整備と精鋭化が一段と進められた。1944年当時の満洲国軍は、大連において行われた日満両軍高射砲部隊の競演において、1～3位を独占する優秀な成績を収める迄に成長した。

かくして、建軍初期、東満3省の治安部隊として発足した8万前後の満洲国軍も、ソ連が侵攻する直前頃迄には、熱河省所在部隊を加えて11個師団の規模に達し、第1軍～第11軍・江上軍（松花江江防艦隊）・航空軍（含飛行学校）・陸軍の高等軍事学校以下12校・禁衛隊（近衛連隊）を擁するに至り、質的にも、関東軍との戦略的な配置の交替が話題にも上る程度までに成長していた。



日系軍官の功勞

ソ連軍の侵攻に伴って、満洲国軍が関東軍の指揮下に入る事となった。国と軍上層部間の約定はどうあれ、急迫し混乱した事態に至ってから、『皇帝親率の軍隊を、出先軍の指揮下に入れる』ということが、その実施の現場、特に、多感な青年が多い第一線部隊にあっては、如何程難しいものであったか、加えて建軍当初から国民党および中国共産党双方からの執拗な工作が行われていたことを考慮に入れると、その気遣いは相当なものであったろう。

ここに至って、国軍の整備と精強化を推進するに当たり、はたまた、この度の難局に直面して、陸軍軍官学校で“同じ釜の飯を食った五族出身の軍官団、その中でも日系軍官団の存在が果たした重要な役割を見逃す訳にはいかない。多民族で構成された満洲国軍の中であって、民族と民族の稜に立ちながら、身を挺して事に当たった日系軍官の苦勞は計り知れないものがあったろう。

日系軍官の職務遂行に対する真摯な態度については、その優れた心技と共に、現地民族の同窓に少なからぬ感化を与え、今なお感銘深く記憶して懐かしむ人が多い。

特に、1944年、『蘭花特別攻撃隊員』として、九七式戦闘機を駆って、奉天上空で、進入したB29に体当たりして散華した春日中尉（軍校1期・陸士56期）のご偉勲は、永久に同窓の胸に残るものである。

終戦当時の日系軍官は、3000名程度と記録されている。これに加えて文官および職員は総数で約1万前後と推定される。次回は『陸軍軍官学校の開設』

秩父平成10年7月 60号

五族之墓—2

伝田信夫 予科軍1-1經理（春日部市）

陸軍軍官学校の開設

建軍当初、将校は、奉天武備学堂（通称奉天講武堂：奉天軍閥張作霖の士官学校。当時としてはかなり高いレベルの教育機関と云われ、赤い裏地の将校マントを風に靡

かせた馬上の姿は、人々の憧憬の的であったという)や緑林(馬賊)の出身者および日本の陸士を卒業した満洲族の一同が主力となり、これに、関東軍顧問団、予備役の日本軍人および5.15 或いは2.26 事件に関わった陸士出身者の一部が加わった。しかし、指揮系統の中枢部においては日系軍官の配置密度は高いが、厳寒僻地の第一線では、1ヶ連隊に家族を帯同した僅か1~2名の日系将校が配置されているに過ぎず、その苦労たるや内地の方々には想像もできない苛酷なものであった。

国軍の整備が進むにつれて、「国軍整備の要訣は、その偵幹たる将校の養成にある」として、正規の課程に基づく将校の養成を図ることとなった。即ち、1939年3月、『陸軍軍官学校令』を制定公布し、新京特別市郊外の拉々屯南崗台(ウラトン・ナンコウダイ)に、『陸軍軍官学校』が開設され、翌1940年1月開校し、同月入校した第1期生(陸士56期)から第7期生(陸士61期)までの1389名が学んだ。開校の翌年1941年6月、皇帝陛下ご親臨の下、第2期生(陸士57期)の入校式が行われ、学校所在の南崗台に『同徳台』の名を賜った。こうして、各民族から選抜された優秀な子弟がここに集まり、特に、満洲国の特質に鑑みて、『五族協和』と『日滿一徳一心』を建軍の本義とし、その培養と実践を基本としながら、正規の軍官教育を受けることとなった。新京同徳台の日滿系の軍官学校の開設と並行して、同時期、蒙古系の騎兵集団を併合し、その軍官養成のための『陸軍興安軍官学校』が開設された。第1期生中の優秀者は、陸士本科において、陸士56期として日系候補生と満系、鮮系の候補生とが寝台戦友となって共に研鑽に努めている。

興安軍校の学校跡は、今も、興安嶺の人口、中村震太郎大尉事件(1931年)縁りの兆南(タオナン)、白城市より更に興安蒙古に入った往時の興安街(現在の烏蘭浩特市:ウランホト)に残っている。

これより先、軍官(士官)の養成機関として『奉天中央訓練処』が開設され、1933年の第1期生から1941年の第10期生まで各科軍官2,541名を送り出している。

軍校同窓の絆

軍官学校の開設に伴って、各民族の中から選抜された優秀な人材が集まって、所謂“同じ釜の飯を食い”ながら『五族協和』と『日滿一徳一心』の精神を、その純粹かつ多感な精神の中に育て、身をもって実践してきた。この中で培った精神は、戦後の特殊な歴史観の中でも、同窓各位の心の中に生き続け、国を跨った交誼が今も絶える事無く続いている。



同期生の散った満蒙の大平原

満軍に所属した一同が浄財を集めて、『五族之墓』と『蘭花之碑』を建立し、協同してこれを守り続けながら、さらなる厚誼を深めているのは、その証左である。池上本門寺の『蘭花之碑』では、毎月第1日曜日に、その月の上番者が、墓地を清掃し、読経をあげて、満洲国軍の「赤い夕陽の満洲に人知れず散った」先輩同期の霊を祀っている。これには毎回20名余が参集している。また、年1回の総会には、全国から、当時の武官文官更には女性職員も参集し、時に中国等の同窓生や、国軍縁りの在日中の留学生も加わり参詣の上、旧交を暖めている。



池上本願寺にある蘭花之碑

先般、シベリヤに眠る第7期生の83名の遺骨が収集され、この『蘭花之碑』に合祀された（詳細は偕行10月号88頁『眠れ戦友』をご覧ください）。満洲国軍に籍を置いた日系軍官は、胸に五色の星と蘭花（国花）の紋様を飾り、偕行社に当る法人として、『蘭星会』を結成している。

隣邦にあっては、韓国の朴正熙第11代大統領（軍校2期、陸士57期）、60期の金潤根予備役海兵中將（歩5-2、金井信雄君）等のように、母国の軍隊の建設に貢献し、或いは、それぞれの祖国において独立運動に挺身した陸士留学生等アジア民族興隆のために活躍した人が数多くおり、これらの人々が親しみの眼をもって日本を見つめている。

また、国府軍に転じた満洲族の同窓生（元小隊長、現在恰ル浜（ハルビン）在住）が、北満から逃れてきた日本人の女学生ら（その内の一人は現在静岡県に在住）を助けた例や、蒙古族の同窓生のように、半世紀にわたり現地で死没した邦人の墓守りをして呉れている人等、その絆の強さを感じる。

今回は「蒙古族同期生との邂逅」

秩父平成10年10月 61号

五族之墓ー3

伝田信夫 予科軍1-1 經理（春日部市）

蒙古族同期生との邂逅

平成9年7月、芦溝橋事件のあった日、7日前後の10日余り、寢台戦友が眠る（1945年8月隊付中ソ進軍の侵攻を受けて戦死）北満興

安蒙古のチチハル、満洲里、シニハイ、昂昂溪、呼倫貝爾（ホロンバイル）、葛根廟（カクコンビョウ）を訪れた。哈拉哈（ハルハ）河、ノモンハンに通ずる蒙古の大草原で、曾つての朋友と『国の鎮め』のテープを流して慰霊を行った。

在校中軍校6期は、関東軍との狭間にあつてある事件を起こし、その結果、航士次いで陸士、陸経と順次本科への派遣留学を命ぜられて日本に戻って来た。

一方、軍医、獣医の候補生は、満洲で本

科 教育をする前の隊付きとして約60名がそれぞれの任地へと出発した。この蒙古方面は、直後ソ聯の侵入することとなり、また、10軍内部での一部の反乱もあり、僅か1ヶ月前に別れた戦友の内、6名はシニハイで、1名は昂昂溪で、5名は葛根廟でそれぞれ無念の戦死を遂げた。

その他の候補生は、終戦後、モンゴルのウランバートルへ、または暁に祈る部隊へ、あるいは承德から北京へと、さまざまな道を辿り、生死を分けた。小生の1-1区隊は、日系6名中、故国の土を踏んだ者は僅か2名である。

この辺境の草原の地は未だ政情も極めて悪く、一行のパスポートは召し上げられ、半ば監視付きの旅行で、形を整えた慰霊行事は行えず、心の中で掌を合わせるばかりの行事となった。この行事は、蒙古族同窓のD中尉（陸士56期生）、E生徒（興安軍校7期・61期相当）の両氏の図らいによるものであった。両氏は、戦後散乱する遺体を集め茶毘に付し、長年に亘り供養してくれているという。文化大革命の嵐にも耐え、80才を越えた今、曾ての同窓生、寢台戦友と再会した次第である。特に、E氏は今もなお、興安軍官学校時代の日系区隊長（56期）を心服敬慕している。

再会を果たした喜びを、蒙古包の中での杯に託し、50年振りに日本語で歌う蒙古族の同窓生のビデオを見る度に、万感胸に遣るのを禁じ得なかった。

彼等も又ソ連に抑留されたのであり、その折に亡くなられた同窓生の名も、『五族之墓』の碑誌に刻まれている。（葛根廟：軍校1期および4期の野営地。ソ連軍侵攻の折、その戦車部隊が、開拓民を含む邦人集団を、蹂躪虐殺した場所である。）

生徒隊長溥傑（フケツ）中校

溥傑氏は、溥儀皇帝の弟。日本の陸士47期卒として、関東軍と満洲国軍との間に立って、両軍の円滑な関係を保つために大変努力された。夫人は、嵯峨侯爵家令嬢浩様。

建国前、溥傑氏は「清朝復辟は武力の充実にある」と、1926年、楽天講武学堂に入学すべく兄皇帝に一通の手紙を残し大連迄来たが、日本官憲によって天津に戻されている。その後「楽天に学び張作霖の部下

余年の人生を支える活力の素となっていた。小生にとっての軍校は、その清流の源である。曾ての歴史観の影響はそれとして、日本人の良い意味での自覚が、徐々にではあるがあるべき方向に向きを変えつつあるように思える。

予て念願の『五族之墓』のお参りを果たし、改めて先人の偉業を思ひ、70年の来し方を振り返ってみて、10代半ばの一時期中に、この上無く充実した日々があったことを、誇りをもって思い起こした次第である。それを原点とし心の支えにしながら余生を全うすることが、礎となられた方々への恩返しとなろう。

最後に、満洲国軍官学校に就いては、日本の同期生は余り知る機会もなかったと思われるので、その一端でも理解して貰えることを念じながら筆を擱く。

1997,1 1,3 記

軍服を脱いで50年余、今猶同期生相集い、腰に手を当て胸を張り目を閉じて歌う「日系軍官の歌」を紹介する。

1. 北 黒竜の水千里
南 万里の長城を
限(カギ)る五色の旗の下
王道楽土建設の
光を浴びて我は立つ
2. 軍籍遠く大陸の
満洲軍に投ずれど
変わらぬ鉄の大和魂
祖国の誉れ身に負いて
雲なぎ払うこの剣
5. 戦友(トモ)よ忘るな東(ヒンガシ)の
我は大和の武夫ぞ
輝く理想日満の
揺るがぬ誓ひ身に背(オ)いて
心にかざせ日章旗